

はじめに

一 「修行者あひたり」

「修行者あひたり」型表現12／助詞「に」を表していないのではないこと14／「修行者あひたり」型表現とはどのような表現か15／古代・中世日本語の「あふ」18／逢魔・逢霊説19／「相手が借りる」22／意志形と無意志形とを分化させていない動詞「あふ」24／無意志の出会いに用いられた「相手にあふ」25／「修行者あひたり」型表現の衰退27

二 「ある」「有」「いる」「居」「おる」「居」

「昔々おじいさんとおばあさんがありました」30／「をり」の語源31／「おる」と「いる」34／南紀方言・八丈島方言の「ある」36／先行研究38／『竹取物語』の「あり」と「をり」40／「ある」と「いる」「おる」46

三 意志動詞「忘る」と無意志動詞「忘る」

有坂秀世氏が考えたこと50／四段活用 of 「忘る」51／四段活用動詞「忘る」の意味56／下

二段活用 of 「忘る」60／忘れる内容が主格に立つ例——「我が面の忘れむしだは」61／「父の写真」63／大和の歌に見える忘れる内容が主格に立つ例65／『今昔物語集』に忘れる内容が主格に立つ例は存するか68／「忘る」の語源69／「忘れかぬ」「忘れず」その他71／有坂説が成り立つ可能性74／忘れる内容がヲ格に立つ確かな例75

四 「前車ノ覆スヲ見テ後車ノ誠ヲ知ル」

吉田澄夫氏の研究78／亀井孝氏の指摘79／『車馬』82／第九二則の原拠85／「覆ル」と「覆ス」89／新古・文体差93／「前車ノ覆ス」の表現価値95／『今昔物語集』の「船俄ニ覆テ」「船打返シテ死ヌ」99／「前車ノ覆ス」の衰退100

五 意志動詞の無意志的用法

意志動詞の無意志的用法104／意志動詞の無意志的用法はいつから見えるか106／意志動詞の無意志的用法の内実108／主語が為手でない場合112／対応する無意志動詞が存するということ115／意志動詞の無意志的用法の成立とその後117／「くてしまふ」118

六 「家の子、郎等多く討たせ、馬の腹射させて、引退く」

強がり表現・負け惜しみ表現から使役表現の随順用法へ122／使役表現の許容用法・随順用

七 「アイマチ」(過)

『史記抄』に見える「アイマチ」 134 / 『史記抄』に見える「アヤマチ」 136 / 『史記抄』の「アイマチ」と「アヤマチ」 139 / その他の抄物に見える「アイマチ」 140 / 「アイマチノ高名」 145 / その後の「アイマチ」 146 / 「アヤマツ」と「アヤマル」 147 / キリシタン資料の「アヤマチ」と「アヤマリ」 149

八 意志動詞化・使役・無意志動詞化・受身——「散ラス」「知らセル」「思わレル」「降らレル」——

他動・使役・自発・受身の接尾語 152 / 奈良時代における「ス」(四段活用) 152 / 奈良時代における「シム」 156 / 奈良時代における「ス」(下二段活用) 159 / 自発・受身の「ユ」「ル」 160 / 無意志動詞に付く「ユ」 161 / 意志動詞化・使役・無意志動詞化・受身 163 / 「ス」(四段活用)「ユ」「ル」の成立 164 / 「ス」(四段活用)「ユ」「ル」の接続 170 / 「ラユ」「ラル」の成立と「ル」「ラル」の定着 172 / 使役「ス」(下二段活用)の成立 173 / 平安時代における使役「サス」の成立 174 / 平安時代における肥大化接尾語「カス」の成立 176 / なぜ「カス」なのか 178 / 平安時代における「シテ」と「セテ」 180 / 室町時代における「シテ」と「セテ」 184 / 現代語の「ス」と「セル」 187

九 「はた迷惑の受身」

自発・可能・受身・尊敬 190 / 「はた迷惑の受身」とは 191 / 受身の類別 193 / 「迷惑」 195 / 「はた」 196 / 望ましくないことだけを表す受身は存するか 198 / 「迷惑」意識・「はた迷惑」意識 201

おわりに 203

あとがき 205

「相手が借りる」

時代が下がる例であるが、大藏虎明（一五九七—一六四二）が寛永一九年（一六四二）に書き留めた狂言の「引敷婿」という曲に次のような台詞がある。婿入りの挨拶に舅の家へ行くことになった男が、日頃目をかけてくれている人の所に報告に立ち寄る。目をかけてやっている人は、婿入りに行く男が袴の袴を着けていないのに気づいて、それを貸してやろうとするところである。

（教え手）／それならばかみ下の下がたらぬが、その分でゆかうとおもふか（婿）／私は是ばかりでよひとぞんじたが、誠に仰らるればさやうでござる、みまらすれば、こなたのは下がござる、身共がのは、物がたらぬやうに御ざる（教え手）／やい／、かみ下があらばおこせひ、ぢや、それはにがつた事じや（教え手）／なふ／あらばやらふとおもふて、たづねたれば、よそへかつていてなひと言ふは。

（現代語訳）（教え手）／それなら袴の下が足りないが、その姿で行こうと思っているのか。（婿）／私はこれだけでよいと思っていました、言われると本当にその通りです。拝見しますと、あなたの袴には下があります。私のには何か足りないようです。（教え手、家の者に向かって）／やい／袴があつたらよこせ、ありや、それは困ったことだ。（教え手）／のう／家に有った

らやろうと思つて、尋ねたところ、他所へ人が借りて行つて無いと言っているよ。

虎明本狂言「引敷婿」（大藏彌太郎（大藏家）古本能狂言集（臨川書店）による）

とぞうたは海も作らぬもいふやうにござるや
まへにその下がたらぬがのいねがうた
まふら 金くさるやあゝあゝあゝあゝあゝ
まふら 金くさるや あゝあゝあゝあゝあゝ
はひねまふのやあゝあゝあゝあゝあゝ
けさのやあゝあゝあゝあゝあゝ

現代語でならば「よそへ貸して無い」というところであろう。虎明本の書写から一五〇年後の寛政四年（一七九二）に虎寛が書き留めた虎寛本狂言では右の台詞が「みなよ所へかして」（岩波文庫中二三〇頁）となっている。上の「あらばやらふとおもふて、たづねたれば」からの続き具合としては、主格を一貫させて、「よそへ貸して無い」と言うのが自然である。それを、わざわざ相手の方を主格にして、「他所へ人が借りて行つてない」と表現しているのはなぜなのであろうか。「よそへ貸して無い」と言う、意志的に貸したという響きをもつからではないか。この人が意志的に貸そうと思つてよその人に貸したのではなく、恐らく家の者がこの人に相談することなく貸してしまつてい